

海外調査団の成果に期待するもの

Expectations Based on Achievement of the Overseas Study Mission

所 長 武 藤 義 一

すでに本誌の新年号のご挨拶でも申し上げましたが、本所では昨年秋に海外における生産技術に関する諸問題を調査するための視察団を結成し、昭和51年10月17日に出発して連合王国、西ドイツ連邦およびアメリカ合衆国をまわり、11月8日に帰国いたしました。尾上教授を団長、田村教授を副団長とし、佐藤教授、石田助教授、高梨助教授、木内助教授および滝沢事務部長の合計7名の団員で約13ヶ所の研究所等を視察し、十分な討論を行ない、多量の資料をもって帰ってまいりました。

本所が、なぜこのような視察団を派遣しなければならなかったのか、ということについて一言ここで申し述べておくべきであると考えて、あえて再び筆をとりました。

わが生産技術研究所が発足したのは今から28年前の昭和24年5月31日のことでありますが、前身の第二工学部の63講座のうちの約半数に相当する35部門で研究所をスタートしました。戦後の混乱中にもかかわらず、日本の復興は生産技術の振興にあるとの所信にしたがって今日まで邁進して参りました。創立当初の苦しい思い出のためあって当所は協同研究が比較的うまく行なわれておりまして、大型プロジェクト研究にも多くの成果を挙げております。その結果、現在では47部門の研究部門を有する国立大学附置研究所のなかで最大規模の研究所になるに至りました。

大学の使命をふりかえりますと、激動する社会において人類が適切に対応してゆくことができるために、常に一步も二歩も先を見ていて、10年か20年後には必ず要求されるであろう、もろもろのことについて、あらかじめ研究しておくということであると信じています。そのような予見と研究を行なうとともに、それをなしとげられるような人材を教育することこそが大学の使命であり、このことは数百年の歴史と伝統をもつ欧州の諸大学が雄弁に物語っているところであります。とくに本所のように特定目的をもたず、各研究者の自主的判断によって研究テーマを決定できる立場にあるところは、10年や20年はおろか、100年も先になって必要になるであろうことも研究しておく義務があると考えべきでしょう。

このためには研究者は常に世界の犬勢を知らなくてはなりません。幸いなことに当所の研究者は全世界の学者を相手として常に第一線に立ち、第一級の研究レベルを保っておりますし、毎日のように誰かがいづれかの国の国際会議に出席して主導的役割を果たしているといっても過言ではありません。しかしながら理工学の研究は、

ひとりひとりの研究者がぬきんでいてだけでは十分な成果が期待できなくなっておりまして、研究所の体制がそれに応じたものでなければならぬことは当然のことです。今回の視察団の帰国後の内輪話にも、超一流の研究者を擁しながら、管理体制の不十分なために力量を発揮できないようなことも聞かされ、管理者の一人としてまことにぞっとすることでした。

研究所の体制をもっともふさわしい状態にするための方策はいろいろありますが、もっとも有効な方法は現在の世界の第一級の研究所について、研究上の諸問題はもとより、研究の機構や運営のやり方などの実際面について、見学すると共に関係者と十分に情報交換を行ない、それらを今後の管理運営面に反映させるということであり、そのことは簡単そうで実はまことに困難な面があります。そのひとつは、当所の多くの研究者がそれらの研究所を訪れておりますが管理運営面のことでの接触は多くなく、もしそれを知ろうとするならば、かなりの準備が必要であるということであり、さらに専門を異にする複数の研究者が同時に訪問する必要があるということでもあります。もうひとつは、いうまでもないことですが多額の旅費を必要とするということでもあります。

この困難なことが鈴木前所長(本学名誉教授)の格別のご配慮ですべて実現できました。鈴木先生は必要な旅費のすべてをご用意下さいましたが、さらに何を主眼として視察すべきか、こちらの用意すべき資料は何かというような細かいことまでご忠告を賜り、とくに管理運営面の調査であることを示唆され、その結果として事務部長が同行しました。事務部長の同行につきましてはご本人の辞退をはじめ、いろいろ問題点もありましたが、無理にも実現いたしました。実は3週間の起居を共にすることによって教官各位に事務関係者の心情を伝えて欲しかったことが多々ありまして、その故もあって事務部長の同行を強制しましたが、その成果はあったと信じます。

調査団の方々は全員無事で帰国されましたが、鈴木先生のご指示もあって全員自由時間なしの完全同一行動でありました。これだけでも調査団の成果であるとは考えております。さらに鈴木先生は報告を求めないようというご指示がありまして、これだけでも守ろうかと思っただけですが内外からの要望もだし難く、この特集を組まざるを得なくなりました。ほんとうは何も報告なしでその成果を100年後に期待したかったのですが、そうならなかったのも成果のひとつとご理解いただければ幸いです。